暁の護衛～罪深き終末論～ 麗華アフター

運命の動脈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
暁の護衛～罪深き終末論～　麗華アフター

【Ｎコード】
Ｎ４５８４Ｒ

【作者名】
運命の動脈

【あらすじ】
禁止区域との争いから一年、麗華と海斗は共に新たな街へ足を運んでいた……

新天地、北海道（前書き）

初投票になります。
先日「暁の護衛」を3部作やらせていただいて、罪深き終末論の麗華ルートの後日談がどうしても読みたかったので、自分で書いてみようと思いました。
初めてなので誤字などあるかもしれませんがよろしくおねがいします。
なお、こういう展開がいいと言う意見があれば書きたいのでそういうのがあれば書いてください。

新天地、北海道

「それじゃあ行って来ます、お母さま。」
ーーーーーーーーーーーーーーーー

「ここが北海道か。」
「ええ、もしかして初めて？」
「二階堂に来る前は禁止区域にいたしな。県外に出たことなんてねぇよ。」
「ま、それもそうね。」

真昼間の北海道の地に麗華と海斗は降り立った。
麗華の母の墓参りの後、尊や薫達と軽く町に出てから麗華と海斗はみんなに見送られながら北海道へ飛んだ。
行き間際に尊がなにか喚いていたが、まあスルーだ。
禁止区域の連中との戦いから一年、憐桜学園を卒業した海斗と麗華は以前に麗華が「いつか二階堂の名が届かない所へ行ってみたい」と言っていたので、人２で話し合ってまずは北海道へ行こうということになった。
そして今現在。

「それにしても北海道って暁東ほど暑くないんだな。」
「まあ、あそこは都心だしね。ここは年間通しても３０℃なんてめったに行かないらしいし…」
「おまえよく知ってんな。」
「小さい頃に一度来たことあるから。」

「ふむ、さすが二階堂のお嬢様ってところか。」
「当然でしょ。」
麗華がふっと微笑む。
海斗は海斗で初めての北海道なのであちこち見ていた。

「…で、此処にはどのくらいいるつもりなんだ？」
「そうね……ざっと2週間位かしら。その間に次の目的地を決めましょう。」
「まあ、金と時間はたくさんあるしな。」
「そういうこと。」
そんな会話をしている内に宿泊所に到着。
今回は二階堂の別荘で下宿する予定なのでお金自体はあまりかかってない。
さすがはお嬢様といったところだろうか。

中に入ると本家ほどではないが十分な広さがあるので2人だと空虚な感じがしてならない。
別荘には使用人などいないので、ご飯にしろ洗濯にしろ自分でしなければならない。

「そういえば昼どうする？」
「そうね……あんた作る？……いえ、やっぱりいいわ」
「なんでだよ。」
「あんたに作らすと変な物いれるでしょう。」
「失敬な。」
むろん、そのつもりだが。
「だから、外で食べましょう。」

「おいおい、外食ばかりしてると背伸びないぞ？」
ドカッ、ゴスッ
「今は関係ないでしょ！！」
回し蹴りを喰らった。
てか少しは加減しろ、だから貧乳なん……
ドカッ、バキッ
「胸は関係ないでしょ！！」
「モノローグを読むな。」
てかこいつ、そんなに気にしてるのか？
よくわからんやつだ。
「ほら、さっさといくわよ。」
「はあ、わかったから殴るな。」
「あんたが余計なこと言うからでしょうが。」
そりゃ、そうだな。
そういや屋敷にいたころはソナタとカナタにも引っ掻かれて災難だったな。
体が丈夫といえど痛いものは痛い。

そういえば蟹料理ってどんなのだろう（前書き）

北海道の場面ですが、僕自体北海道とか行ったことないんでへんな部分があったらすいません。

そういえば蟹料理ってどんなのだろう

麗華とのいざこざのあと街に出て来たが、既にお昼を過ぎてしまっていた。

「あんたのバカに付き合ってたからもうこんな時間じゃない。」
「俺のせいというか麗華が俺を「なんか言った？」……なんでもありません。」
麗華に睨まれ俺は閉口する。
「せっかく二人きりなのに……」
「なんか言ったか？」
「べ、別に何も言ってないわよ！！」
まあ聞こえてたけど。
真っ赤になって、かわいいやつだ。
「……それで何食べるの？確か海鮮がうまいとかいってなかった？」
コホン、と息をして麗華が聞いて来た。
「そういえばそんなこと言ってたな。」
「あんた、ほんと適当よね。」
「おまえほどじゃない。」
「うるさい。」
「……蟹でも食いに行くか。」
麗華がキレそうなので無難なところで切り上げる。
「じゃ、捜すわよ。」
その後蟹料理の専門店で食事をし、街を適当に見ながら歩いていたらもう太陽が落ちかけていた。

「南条達どうしてるかしら？」
海岸沿いに夕日を見ていたら麗華が俺に聞いて来た。

「どうした、急に。」
「いえ、ちょっとね……」
麗華は俯きかけた顔を上げ、俺を見た。
「今度来るときはみんなで来たいわね。」
「ま、機会があったらな。」

別荘に戻った時にはもう辺りは真っ暗だった。
「今日は一日歩いて疲れたわね。」
「まあ楽しかったならいいんでねぇの？」
「それもそうね。」
少し微笑んで麗華は言った。
「お風呂と夕飯どうする？」
「……そういや自分でやらなきゃいけないんだったな。」
すっかり忘れてた。面倒くせぇ…
「夕飯は共同で作るとして、あんた先にお風呂入ったら？」
「いや、おまえ疲れてるんだろ？」
「そりゃそうだけど…」
「じゃ先入れ。俺小説でも読んでるから。」
「そう？なら、そうさせてもらうわ。」
「そうしろ。あ、バストアッ……」
ドゴッ
「何か言った？」
「いや……」
麗華の殺気がすごいのでこの辺で止めとこう。

麗華が風呂から出たあと、昼が遅かったので二人で軽く夕飯を作って平らげ、俺も風呂に入った。

寝る前に俺は麗華のところにいた。
「どう？北海道は？」
「夏だけど涼しくて良いところだな。」
「そう…ならよかった。」
「そういや海岸に釣り出来るところあったが明日行ってみるか？」
「いいわね。釣りなんてあの旅行以来ね。」
「あの時の勝負は負けたが明日は勝たしてもらう。」
「才能のある人間に人も魚ついてくるのよ。」
「あの時もそんなこと言ってたな。」
「そうね。あの旅行はいろいろあったしね。」
「あの時の麗華は可愛かったぜ。」
「ば、か、かわいいとか、バカ言ってんじゃないわよ！！」
「ほんとのことなんだけどな。」
そう言って麗華の体を抱きしめてベットに押し倒す。
「あっ……海斗…」
「麗華綺麗だな。」
電気を消した部屋に月の光が降り注いでいた。

そういえば蟹料理ってどんなのだろう（後書き）

いや～小説って難しい……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4584r/

暁の護衛～罪深き終末論～ 麗華アフター

2011年3月15日13時12分発行